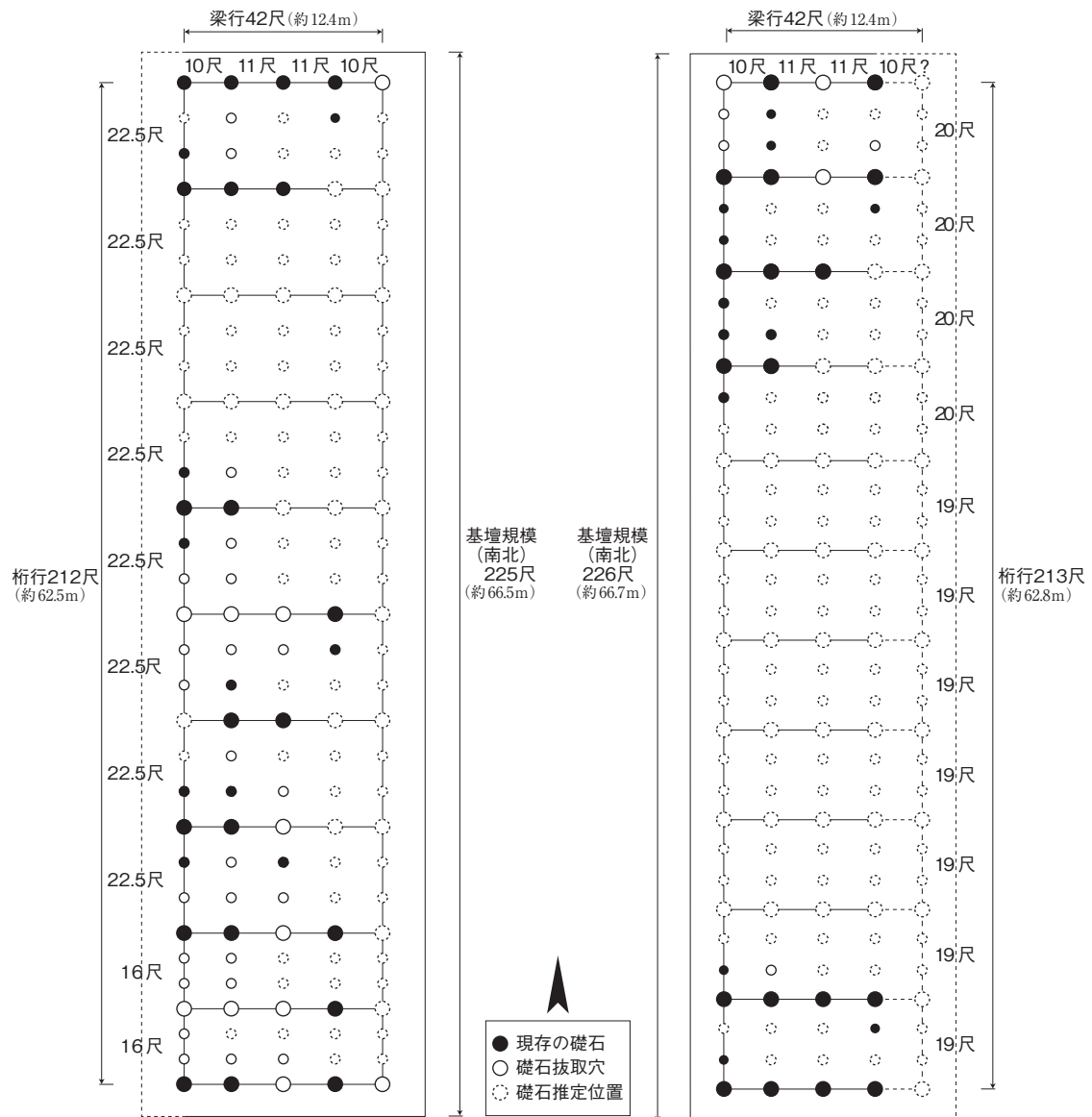


7 成果と課題

(1) 中室の調査成果

中室の規模と柱配置 中室大房は長大な南北棟礎石建物であり、発掘調査の結果、桁行総長は約62.8m（213尺）であることが判明した。柱配置は、発掘調査の成果および地表に露出している礎石の測量成果をふまえると、桁行11間で、北4間分が20尺等間、南7間分が19尺等間とみるのがもっとも整合的である（第31図）。ただし、今回の調査では中室の北端（A区）と南端（B区）を検出したのみで、その間の未調査部分は看過できないほど広い。先学が調査をおこなった昭和前半頃に地表面に露出していた礎石は、その後の境内整備の盛土により、現在では多くが地中に埋もれている。そこで、発掘調査の成果を補完するデータを得るべく、地中レーダー（GPR）による探査をおこなった。その結果、中室の柱筋において点状の反射が見られ、礎石およびその痕跡の可能性を指摘することができた。個々の柱位置を特定するためにはさらなる調査が必要であるが、現時点では、中室の柱配置について



第31図 興福寺西室（左）・中室（右）柱配置復原模式図

は、上述の復元案がもっとも妥当なものと考えておきたい。中室の梁行は、西から3間分が10尺・11尺・11尺であり、以東は現在の参道にあたるため調査できなかった。この寸法は、西室の発掘調査成果と一致することから、中室も西室と同じく梁行4間で総長は42尺、柱間寸法は中央2間が11尺で両脇間が10尺と推定される。基壇の規模は、南北が約66.7m(226尺)で、東西が13.5m以上。基壇の出は、北面と南面がそれぞれ約2.0m(6.5尺)、西面が約2.1m(7尺)、東面は不明である。基壇の北面と南面では基壇外装の地覆石と羽目石が、西面北部では地覆石が遺存していた。これらはすべて二上山産の凝灰岩を使用している。雨落溝は、西面では境内の主要な排水路を兼ねた中世の石組溝SD7623を検出し、その底面で古代の雨落溝の可能性のある南北溝SD10981を検出した。北面では検出されなかったが、元来なかったのか後世の削平などにより失われたのかは判然としなかった。なお西室では、北面の雨落溝は検出されず、基壇東南隅で地覆石に接して石組の雨落溝を検出している。

今回の調査で得られた上記の中室大房の建物規模は、従来の復元案と比べて、桁行が長く梁行が短い。また、西室の場合と同様、『流記』に記された建物規模との不一致が問題となる。

中室と西室の比較 西室大房については、2013年度調査(第516次)と2014年度調査(第540次)により、規模と柱配置が判明している(『概報Ⅶ』)。それによれば、西室大房は、桁行10間、約62.5m(212尺)、梁行4間、約12.4m(42尺)の南北棟礎石建物である。基壇の規模は、南北が約66.5m(225尺)で、基壇の出は南北それぞれ約1.9m(6.5尺)である。基壇の東西規模は明確ではないが、東面の基壇の出は約1.9m(6.5尺)と考えられている。桁行総長と基壇の南北規模は中室の方が西室より1尺長く、基壇の出は中室の西面と西室の東面で若干異なる可能性があるが、建物と基壇の規模は、両者ほぼ同じと言って差し支えないだろう。

一方で、桁行の柱間寸法については、西室は南2間分が約4.8m(16尺)で、それ以北の9間分が約6.6m(22.5尺)である。同じ桁行11間ながら、20尺と19尺を用いたほぼ均等な割付と推定される中室とは、柱配置が大きく異なる。東西対称の位置にある僧房は、柱配置まで含めて対称であるのが一般的と考えられている。その点で興福寺中室と西室の例は、古代の僧房の実態を考える上で興味深い資料を提供したといえる。なぜこのような非対称な柱配置をとったのかについては、全体の伽藍配置や個々の建物の使用法に関わると予想され、今後の検討課題である。

(2) 経蔵・鐘樓の調査成果

経蔵・鐘樓の規模と柱配置 経蔵は、桁行3間、約10.1m(34尺)、梁行2間、約6.5m(22尺)の南北棟礎石建物で、柱間寸法は、桁行が中央間12尺・両脇間各11尺、梁行が11尺等間である。基壇の規模は、南北が約14.5m(49尺)、東西が約10.5m(37尺)。基壇の出は、四周いずれも約2.2m(7.5尺)である。基壇外装は、一部で室町時代以降に据え付けられたとみられる羽目石を確認した。古代に遡る基壇外装やその痕跡は確認できなかったが、再建時に同じ位置を踏襲して据え付けられているためと考えられる。雨落溝は検出されず、基壇北方の小砂利敷に雨垂れの痕跡が見られたことから、雨落溝はともなわれないと考えられる。

鐘樓も経蔵と同じく桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物である。地表に露出している礎石の測量成果によれば、桁行総長は約10.0m(34尺)、梁行総長は約7.1m(24尺)で、柱間寸法は桁行が中央間12尺・両脇間各11尺、梁行が西11尺・東13尺である。梁行が等間にならない点については、梁行中央(棟通り)の礎石列が検出した基壇の東西中央に位置すること、経蔵の梁行中央の礎石列と伽藍中軸線を挟んで

対称の位置にあることから、未発掘のため断定はできないものの、東側柱列の礎石が原位置より東に動いているためと考えられる。本来の鐘樓の梁行は、経蔵と同じく11尺等間であったとみておきたい。基壇の規模は、東西約11.0m (37尺)、南北約14.5m (49尺)で、基壇の出は、北面と西面が約2.2m (7.5尺)、東面と南面は不明である。基壇外装は、一部で室町時代以降のものとみられる羽目石を確認した。雨落溝は確認していない。なお、享保2年(1717)の焼亡前後に描かれた『興福寺建築諸図』によれば、鐘樓の梁行は10.8尺等間である(6頁)。同図はおよそ当時の礎石の上に再建しようとした計画図とみられることから、近世に焼失した鐘樓が建てられた室町時代以降、礎石の位置は変わっていないと考えられる。したがって、鐘樓の東側柱列の礎石は、『興福寺建築諸図』の作成以降に何らかの事情で東へ2尺ほど動かされた可能性がある。

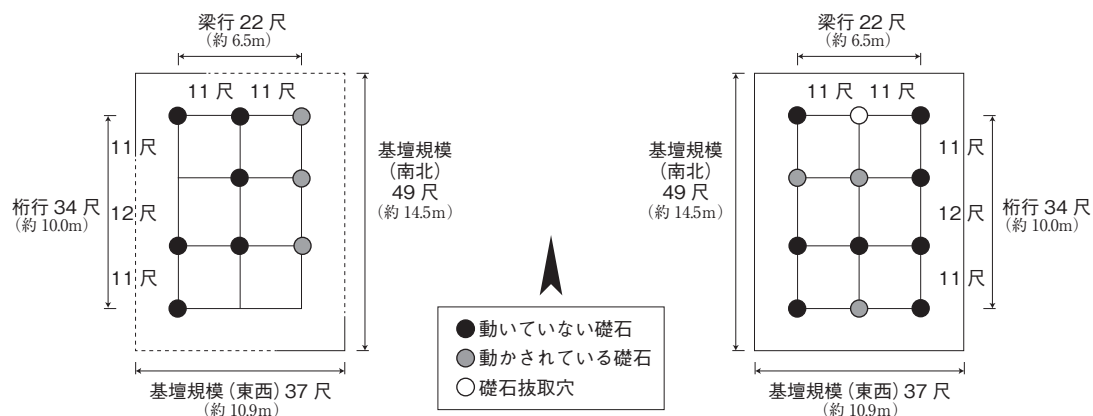
以上の点から、経蔵と鐘樓は、伽藍中軸線を挟んで東西対称の位置にあり、規模と柱配置を同じくする双子の建物であったと考えられる(第32図)。経蔵と鐘樓の両樓を発掘調査で確認した事例はなく、予想された成果ではあるが、その実態をあきらかにできた意義は大きい。

鐘樓の規模は変化したか 今回の調査で得られた上記の建物規模は、『流記』の記述と整合的であり、従来の復元案(大岡實説)を支持するものである。一方で『流記』によると、鐘樓は8世紀中頃から9世紀初頭にかけては、長さ46尺(約13.6m)、広さ35.3尺(約10.4m)で、経蔵より規模の大きな建物であった。桁行・梁行ともに経蔵より柱間1間分程度大きく、規模の拡大や縮小には建替に近い工事をともなうと推定される(6頁)。しかしながら今回の発掘調査では、建物の建て替えや基壇規模の拡張・縮小の痕跡は、確認できなかった。

ただし、鐘樓基壇の北方と東南方で、創建期に遡る可能性のある小礫敷を検出していることは注意される。小礫敷の検出範囲は、長さ=桁行総長46尺とした場合の基壇と重複する位置にある(基壇の出は桁行総長34尺の場合と同じとする)。小礫敷が創建期に遡るとすれば、鐘樓は当初から経蔵と同規模であった可能性がある。『流記』の鐘樓の記載については袴腰の下端の規模を記している可能性があり(6頁)、両樓は創建期から一貫して同規模であったとみることも一案であろう。その場合、8世紀中頃～9世紀初頭は鐘樓のみが袴腰付きで、両樓の規模は同じながら、外観が異なっていたことになるかもしれない。さらなる検討が望まれる。

(3) 建物周囲の様相

経蔵・鐘樓北方の石組溝と玉石敷 経蔵と鐘樓の北方には、東西方向の石組溝が設けられており、



第32図 興福寺鐘樓(左)・経蔵(右)柱配置復元模式図

そのさらに北方には、東西方向の玉石敷が敷かれていた。

石組溝の心は、経蔵・鐘樓の北側柱筋の礎石心より北に約4m離れている。『興福寺建築諸図』に見える経蔵や鐘樓の軒の出は12.5尺(3.8m)前後と計測でき(7頁)、それらの雨落溝とみるには若干遠い。溝底の標高からみて、講堂周辺の雨水を東と西へ、もしくは東から西へ排水する機能を担ったものと推定される。石組溝の延長は、講堂基壇の東西両側面の南部にあたる(第33図)。講堂南面の雨落溝は石組であり(『興福寺仮金堂建設工事報告書』興福寺、1975)、講堂の四周を巡る石組の雨落溝に接続していた可能性も考えられよう。

玉石敷は、いずれも北端を検出しておらず南北の規模は不明であるが、広範囲に敷き詰められたものではなく、経蔵西方の玉石敷SX8085のように、2m程度の幅をもつ通路状の遺構と推測される。その場合、経蔵北方の玉石敷SX10985を東へ延長すると、中室大房の北から5間目にあたり、さらに東の延長上には、食堂から西に延びる軒廊がある。西へ延長すると、講堂基壇の南部にあたる(第33図)。「肝要図絵類聚抄」(興福寺蔵)によると、講堂基壇の東西両側面には、南方に寄って階段が描かれている。鈴木嘉吉は、講堂前端の間と食堂の間とは軒廊によって結ばれており、それが中室大房の北から5間目を馬道として貫くと推定した。今回の調査では軒廊の痕跡は確認できなかったが、玉石敷SX10985は、食堂と講堂を結ぶ通路の存在を示す点で、鈴木説を裏付ける遺構といえるだろう。中室大房の北から5間目が馬道にあたるとすれば、馬道より北は柱間寸法が20尺、南は19尺となり、馬道を境に北と南で僧房の規模が異なっていたことになる。

なお、鐘樓北方の玉石敷SX10995についても、西室と講堂を結ぶ通路としての機能を想定することができ、西に延長すると、西室大房の北から4間目の南端付近にあたる。

玉石敷・石組溝の築造と廃絶 築造時期について、石組溝は基盤層直上に据え付けられており、創建期に遡る可能性が高い。玉石敷は石組溝と併存していたとみられるが、石組溝より遅れて敷設された可能性もある。経蔵西方の玉石敷SX8085は、第325次調査区では下層に焼土が確認されていること(『概報Ⅲ』、2002)も留意される。

廃絶時期について、経蔵北方の石組溝SD10980は、中世の石組溝SD7623に壊され、経蔵北方の玉石敷SX10985は、土坑SK10986に壊されている。土坑SK10986からは12世紀後半頃の土器が出土しており、火災を契機とみれば、治承4年(1180)の南都焼き討ち後に、経蔵北方の石組溝と玉石敷はともに機能を停止したと考えられる。鐘樓北方の石組溝と玉石敷にも敷衍できるとすれば、南都焼き討ち後の復興の過程で、基壇建物周囲の景観が大きく変わった可能性もある。

(桑田) 第33図 経蔵北方の石組溝・玉石敷と講堂(東から)

